

「ベレアでの伝道」

使徒 17：10～15

1. はじめに

(1) パウロの旅程

①マケドニア州でのパウロ伝道

＊ピリピ、テサロニケ、ベレア

②前回は、テサロニケでの伝道を取り上げた。

＊ユダヤ人たちが町のならず者たちを煽動し、暴動を起した。

＊暴徒たちは、新しく信仰に入ったヤソンの家を襲った。

＊パウロとシラスは、夜のうちにテサロニケから逃れた。

③今回は、ベレアでの伝道を取り上げる。

＊現在は、ヴェリア、ヴェロイアなどと呼ばれている。

＊ここは、マケドニア伝道の最後の町である。

④写真3点

＊道路標識

＊パウロの祭壇

＊モザイク

(2) アウトライン

①テサロニケからベレアへ（10 節）

②伝道の結果（11～12 節）

③ユダヤ人の暴動（13 節）

④避難（14～15 節）

結論：ベレアでの伝道から学ぶ教訓

(1) 迫害の中での教会成長

(2) 次の町へ

(3) 試練と慰めのサイクル

(4) 聖書研究の重要性

ベレアでの伝道について学ぶ。

I. テサロニケからベレアへ（10 節）

1. 10 節

Act 17:10 兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂に入って行った。

(1) テサロニケの兄弟たちは、夜のうちにパウロとシラスを送り出した。

①パウロが夜のうちに町を出るのは、これが2度目である。

②使9:24~25（ダマスコでの出来事）

Act 9:24 その陰謀はサウロに知られてしまった。彼らはサウロを殺してしまおうと、昼も夜も町の門を全部見張っていた。

Act 9:25 そこで、彼の弟子たちは、夜中に彼をかごに乗せ、町の城壁伝いに降り降ろした。

(2) パウロが去った後でも、テサロニケの教会は健全に成長し続けた。

①この教会は、試練の中で成長する教会であった。

(3) パウロとシラスは、イグナチオ街道を通してベレアに向った。

①テサロニケからアテネに向う途中にある町

②テサロニケからベレアまでは、南西に約80キロの道のりである。

③パウロは落胆するどころか、ますます伝道の意欲に燃えた。

④ベレアは、マケドニアの古い町である。

⑤この町には、多くのユダヤ人が住んでいた。

(4) パウロの伝道パターン

①会堂に行き、先ずユダヤ人に語りかけ、次に異邦人に語りかける。

②ルカは省略しているが、テサロニケで起こったのと同じことが起こっている。

③使17:2~3

Act 17:2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。

Act 17:3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。

④パウロは、巡回ラビとして奨励を依頼された。

⑤彼は、旧約聖書からメシア預言を取り上げ、それを解説した。

⑥福音の三要素を提示し、イエスこそメシアであることを旧約聖書から論証した。

Ⅱ. 伝道の結果（11~12節）

1. 11節

Act 17:11 このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心
みことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。

(1) ベレアのユダヤ人たちの特徴

- ①彼らは、妬みによって行動しなかった。
- ②「この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、」(新改訳 2017)
- ③聖書に対して心が開かれていた。
- ④聖書を体系的に調べる能力があった。
- ⑤偏見なしにパウロの主張を吟味する心の準備が出来ていた。
- ⑥彼らは、毎日聖書を調べた。

2. 12 節

Act 17:12 そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシヤの貴婦人
や男子も少なくなかった。

(1) その結果、多くのユダヤ人たちが信仰に入った。

- ①ソパテロもそのひとりであった。
- ②使 20 : 4

Act 20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリス
タルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。

(2) さらに、多くの異邦人が信仰に入った。

- ①ギリシア人の貴婦人たち
- ②男性たち（恐らく貴族階級であろう）
- ③これらの人たちは、神を恐れる異邦人である。

Ⅲ. ユダヤ人の暴動 (13 節)

1. 13 節

Act 17:13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレヤでも神のことばを伝
えていることを知り、ここにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。

(1) ベレアでの伝道を妨害したのは、テサロニケのユダヤ人たちである。

- ①彼らは、パウロがベレアでも伝道しているということを聞いた。
- ②そこで、代表団を召集した。
- ③彼らは、約 80 キロも旅をして、ベレアにやって来た。
- ④彼らは、ベレアでも群衆を扇動して騒ぎを起こした。

(2) ベレアのユダヤ人たちとは対照的である。

- ①ベレアのユダヤ人たちは、パウロの教えが聖書と一致しているかどうか調べた。
- ②テサロニケのユダヤ人たちこそが、「世界中を騒がせて来た者」である。

IV. 避難（14～15 節）

1. 14 節

Act 17:14 そこで兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して海べまで行かせたが、シラスとテモテはベレヤに踏みとどまった。

(1) パウロは、ただちにベレアを去った。

- ①シラスとテモテは、ベレアに残った。

(2) パウロの行程には、2つの可能性がある。

- ①ベレアから海路でアテネまで行った。
- ②海路で行くと見せかけて、陸路で行った。
- ③これで、マケドニアでの伝道が終了し、次にアカヤでの伝道が始まる。

2. 15 節

Act 17:15 パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そしてシラスとテモテに一刻も早く来るように、という命令を受けて、帰って行った。

(1) ベレアの信者たちは、パウロをアテネまで案内した。

- ①ベレアからアテネまでは、約310キロある。
- ②シラスとテモテは、ベレアに残って弟子訓練の働きを続けた。
- ③パウロは、シラスとテモテが一刻も早く自分に合流するようにと伝えた。

(2) シラスとテモテは、アテネでパウロに合流した。

- ①ふたりを待つ間に、パウロは単独でアテネでの伝道を行った。
- ②その後、パウロはふたりをマケドニアに派遣した（自分では行けないので）。

＊テモテをテサロニケに派遣した（1テサ3：2）。

＊シラスを恐らくベレアに派遣した。

- ③シラスとテモテは、コリントでパウロと合流した。

④使18：5

Act 18:5 そして、シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。

結論：ベレアでの伝道から学ぶ教訓

1. 迫害の中での教会成長

(1) 迫害の中でも、テサロニケ教会が成長した理由

- ①みことばを伝えることによって、信者を獲得する。
- ②信者に聖書を教える。
- ③他の人に福音を伝えるように教える。

(2) 1テサ1：6～8

1Th 1:6 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。

1Th 1:7 こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。

1Th 1:8 主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。

2. 次の町へ

(1) 伝道のために先に進むのは、聖書的である。

(2) マタ10：23

Mat 10:23 彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。

- ①この原則は、イエスが十二弟子に教えたものである。
- ②ここには、普遍的な適用がある。
- ③耕された土地を見つけ、そこに種を蒔く。

3. 試練と慰めのサイクル

- (1) 試練が来るのは、神の国と悪魔の国が葛藤しているからである。
 - (2) パウロとシラスは、神の国のメッセンジャーである。
 - (3) テサロニケのユダヤ人たちは、悪魔の国のメッセンジャーである。
 - (4) ベレアのユダヤ人たちは、パウロにとっては大いなる慰めである。
- (例話) 病院伝道をしたある兄弟からの報告

4. 聖書研究の重要性

(1) 使17：11～12

Act 17:11 このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱

心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。

Act 17:12 そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシヤの貴婦人や男子も少なくなかった。

(2) 訳文の比較

- ①「そのため」（新改訳）
- ②「それで」（新改訳 2017）
- ③「そこで」（新共同訳）
- ④「そういうわけで」（口語訳）
- ⑥「この故に」（文語訳）

(3) ベレアのユダヤ人から学ぶ教訓

- ①パウロの語ることを受け入れた。
 - * 「非常に熱心にみことばを受け入れ」（新改訳 2017）
- ②パウロの語ることが聖書と一致しているかどうか調べた。
- ③毎日聖書を調べた。

(4) 悪魔との戦いに勝利する秘訣は、単純な聖書研究である。

- ①新しい教えに接したなら、聖書と一致しているかどうか吟味する必要がある。
- ②聖書観の崩壊は、キリスト教信仰の崩壊につながる。
- ③悪魔は、単純な聖書研究を最も恐れている。

「アテネでの伝道（1）」

使徒 17：16～21

1. はじめに

(1) パウロの旅程

①マケドニア州でのパウロ伝道が終わった。

＊ピリピ、テサロニケ、ベレア

②ここから、アカヤ州での伝道が始まる。

③地図の表示

④アテネでの伝道は、パウロの当初の計画に入っていなかった可能性がある。

⑤考えられる当初の計画は：

＊マケドニア州をそのまま西に向い、反対側の海岸に出る。

＊そこから船に乗り、直接ローマに行く。

⑥ロマ 1：13

Rom 1:13 兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。

⑦ローマに行かなかった理由は：

＊ローマからのユダヤ人追放令が出された直後である。

＊マケドニア州を安全に移動することができなくなった。

(2) 写真 5 点

①パルテノン神殿①と②

②アレオパゴス①と②

③アゴラ

(3) アウトライン

①偶像で満ちた町（16 節）

②広場での伝道（17～18 節）

③アレオパゴスに連行されるパウロ（19～21 節）

結論：

1. パウロによる偶像礼拝の糾弾
2. ギリシア哲学とキリストの福音の対峙

アテネでの伝道（1）について学ぶ。

I. 偶像で満ちた町（16節）

1. 16節

Act 17:16 さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。

（1）アテネ

- ①エーゲ海から8キロ内陸に入った所にある町である。
- ②ギリシアの中心都市であり、民主主義発祥の地としても有名である。
- ③アテネの黄金時代は約500年前に終わっていた。
 - *前4～5世紀の文化的、政治的な功績により、ヨーロッパに影響を与えた。
 - *パウロが訪問した時には、第一級の都市としての地位は失っていた。
- ④しかし、大学都市としての地位は保っていた。
 - *アレキサンドリア、タルソ、アテネ
- ⑤また、ローマ帝国内における哲学、芸術、文学の中心都市でもあった。

（2）ここでパウロは、シラスとテモテの到着を待っていた。

- ①ふたりは、ベレアに留まっていた。
- ②恐らく、パウロが待っていた期間は、ほんの1週間程度であろう。
- ③その間、パウロは単独で伝道を開始する。
- ④その理由は、「心に感じた憤り」である。

（3）「町が偶像でいっぱいなのを見て、」

- ①アテネという名は、女神アテナに敬意を表するために付けられたものである。
- ②アクロポリスの上にはパルテノン神殿が建っている（アテナを祀る神殿）。
- ③この町は、数多くの神殿と彫刻された像で満ちていた。
- ④パウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。
 - *現代の私たちにとっては、アテネの遺跡は文化遺産である。
 - *パウロにとっては、それらの建造物は偶像礼拝の反映である。
 - *パウロは、ギリシア・ローマ風の都市に慣れていて、
 - *しかし、アテネの偶像礼拝は、許容限度を超えていた。
 - *ペトロニウスという風刺作家はこう書いている。
「アテネでは、人間を見つけるよりも偶像を見つける方が容易である」

II. 広場での伝道（17～18節）

1. 17 節

Act 17:17 そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた。

(1) パウロが採用した伝道の原則

①使 17：2～3（テサロニケでの伝道）

Act 17:2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。

Act 17:3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。

②先ずユダヤ人に、次に異邦人に。

③旧約聖書のメシア預言を基に、イエスこそキリストであると論じた。

(2) パウロは、アテネでも同じ伝道の原則を実施した。

①安息日に会堂を訪問し、ユダヤ人や神を敬う異邦人たちと論じた。

②ユダヤ人伝道を実行した後、直ちに異邦人伝道を開始した。

(3) 週日には、広場（アゴラ）に行き、そこに居合わせた人たちと論じた。

①彼らは、異教徒の異邦人たちである。

②アゴラは、公の市場であり、公園であり、町の中である。

③そこは、巡回教師たちが人々に知識を伝える場所となっていた。

④そこには、議論好きの人たちが集まっていた。

⑤議論好きの人たちの中に、哲学者もいた。

*エピクロス派の学者とストア派の学者

*この2つは、当時のギリシア哲学の代表的な学派である。

2. 18 節

Act 17:18 エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」と言い、ほかの者たちは、「彼は外国の神々を伝えているらしい」と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。

(1) エピクロス派

①創始者は、エピクロス（前 341～270 年）である。

②この学派の教えの基本は、唯物論に基づく快楽主義である。

*快楽主義と言っても、欲望の充足を求めるようなものではない。

* 快樂とは、欲望、苦痛、死の恐怖から解放された平静な状態のことである。

* エピクロス自身は、肉体的快樂をむしろ「苦」と考えた。

③ たとえ神々が存在したとしても、人間に関心を持ったりはしない。

④ それゆえ、体系化された宗教は悪である。

⑤ 死はすべての終わりである。

⑥ 彼らは、世俗的不可知論者である。

(2) ストア派

① 創始者は、ゼノン（前 340～265 年）である。

② 破壊的な衝動は判断の誤りから生まれるので、自然との調和が必要である。

③ 賢人（道徳的・知的に完全な人）は、破壊的な衝動に苛まれることはない。

④ 賢人は、宇宙理性としてのロゴス（神）が世界に遍在することを知っている。

⑤ いっさいの事象は、そのロゴス（神）の摂理によって必然的に生起する。

⑥ 賢人とは、内心の理性にのみ聴く人である。

⑦ 賢人は、アパティア（悟りの境地）に入り、真の幸福に到達することができる。

⑧ この学派の特徴は、「人間の理性」に対する絶対的な信頼である。

* 彼らは、相当に傲慢であったと言われている。

⑨ この立場は、キリスト教の人間理解とは正反対のものである。

⑩ 彼らは、汎神論者である。

⑪ また、運命論者である。

(3) 哲学者たちは、2つの反応を示した。

① 「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」

* 「おしゃべり」とは、鳥が蒔かれた種をついばむ様子から出た言葉である。

* パウロのことを、あちこちから教えをつまみ食いしてきて、それをさも自分のものであるかのように語っている安物教師と考えたのである。

② 「彼は外国の神々を伝えているらしい」

* パウロは、イエスとその復活を伝えていた。

* 彼らには、その意味が全く理解できなかった。

IV. アレオパゴスに連行されるパウロ（19～21 節）

1. 19～20 節

Act 17:19 そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行ってこう言った。「あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。」

Act 17:20 私たちにとっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。」

- (1) 哲学者たちは、パウロの語ることに興味を示した。
 - ①彼らは、新しい教えを聞くことに喜びを覚えていた。
 - ②そのために生きているようなものである。
- (2) 彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行った。
 - ①招かれたのか、出頭命令を受けたのかは、明らかではない。
 - ②アレオパゴスは、場所を指す場合と、評議会も指す場合がある。
 - *場所の場合は、マルスの丘である。
 - *評議会の場合は、アゴラの中の建物である。
 - ③この評議会は、アテネ政治における貴族勢力の牙城である。
 - *30人の議員がいた。
 - *ローマの元老院のような役割を果たした。
 - ④この評議会は、宗教、道徳、教育に対する権威を有していた。
 - ⑤また、巡回教師たちの教えや活動を吟味する役割も果たしていた。
- (3) 当時のローマ法では、新しい宗教を伝えることは違法とされていた。
 - ①アテネの哲学者ソクラテスは、前399年に、伝統的な神々を否定し若者を惑わす危険思想を教えたとして有罪になり、刑死した。
 - ②パウロに起こったことは、裁判そのものではなく、聴聞である。
 - ③パウロもまた、ある種の危険に晒されていたのである。

2. 21節

Act 17:21 アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。

- (1) ルカは、アテネ文化に詳しくない読者のために、挿入句を書いている。
 - ①アテネの住民たちは、新しい情報に異常なほどの関心を持っていた。
 - ②それゆえ、パウロはアレオパゴスで証言する機会を得たのである。

結論：アテネでの伝道（1）から学ぶ教訓

1. パウロによる偶像礼拝の糾弾

- (1) ユダヤ人たちは、元来偶像礼拝に走る傾向のある民であった。
- (2) しかし、バビロン捕囚を経験して以降、偶像礼拝から解放された。

- (3) アテネは、500年前に最盛期を迎えていた。
 - ①ペリクレス（前495～429年）が、アテネの最盛期を築き上げた。
 - ②主な建造物は、この時代に建設された。
 - ③アテネの芸術は、偶像礼拝の反映である。
- (4) アテネの最盛期に、イスラエルで起こっていたこと
 - ①ネヘミヤ記に記された出来事（前445～420年）
 - ②捕囚期後の預言者たちの奉仕（ハガイ、ゼカリヤ、マラキ）
- (5) イスラエルが神に立ち帰っていた時期に、アテネは偶像礼拝を広めていた。
- (6) パウロは、イエスを信じるユダヤ人として偶像礼拝に強く反発した。
 - ①ロマ1：22～25

Rom 1:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、

Rom 1:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

Rom 1:24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。

Rom 1:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

2. ギリシア哲学とキリストの福音の対峙

- (1) ギリシア哲学者たちは、ヘレニズム思想の代弁者である。
 - ①世界の知的センターが、偶像礼拝を生み出していた。
 - ②アテネの偶像礼拝は、人間性や自然の力を神格化したものである。
 - ③動物を神格化するよりもましであるが、人間を引き上げる力はない。
 - ④彼らが語っていることは、人間の知恵から生まれたことである。

＊世俗的不可知論

＊汎神論

- (2) その彼らにパウロは、イエスの死と復活を宣べ伝えた。
 - ①人の知恵と神の知恵とがぶつかり合う。
 - ②そして、前者は後者をあざ笑うのである。
 - ③今日、アテネの偶像たちは、遺跡としてしか存在していない。
 - ④しかし、パウロが伝えた福音は、今も世界に広がり続けている。

「アテネでの伝道（2）」

使徒 17：22～28

1. はじめに

(1) パウロの旅程

- ①マケドニア州でのパウロ伝道が終わった。
- ②アテネから、アカヤ州での伝道が始まる。
- ③地図の表示

(2) 文脈の確認

- ①まずユダヤ人に、次に異邦人に。
- ②パウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。
- ③広場（アゴラ）では、毎日そこに居合わせた人たちと論じた。
- ④エピクロス派とストア派の哲学者たちが、パウロと論じ合った。
- ⑤パウロはアレオパゴスに連れて行かれた。
 - *これは、聴聞である。
 - *パウロは、相当危ない状態に置かれていた。
- ⑥ここにあるのは、知的な異邦人に語られたメッセージのサンプルである。
 - *彼らは、旧約聖書に関して無知である。
 - *彼らは、非常に知的で哲学的である。
- ⑦パウロは、ユダヤ教のラビからギリシア人の雄弁家の姿に変貌した。
 - *タルソで育ったことが大いに役立ったと思われる。

(3) アウトライン

- イントロダクション（22～23 節）
- ①創造主としての神（24～25 節）
- ②被造物としての人間（26 節）
- ③神と人間の関係（27～28 節）
- ④悔い改めへの招き（29～31 節）
- 結果（メッセージに対する応答）（32～34 節）

結論：

- 1. 伝道の基本的姿勢
- 2. 異邦人伝道にみられるヘブル語聖書の背景

アテネでの伝道（2）について学ぶ。

イントロダクション（22～23節）

1. 22節

Act 17:22 そこでパウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。」

(1) 先ず、聴衆との接点を見出す必要がある。

- ①聴衆は異邦人なので、ヘブル語聖書は接点とはなり得ない。
- ②また、唯一神信仰も接点とはなり得ない。
- ③パウロが採用したのは、アテネの人たちが宗教心にあついという点である。
- ④パウロは、先ず聴衆のことをほめた。
- ⑤彼は、相手を侮辱したり、怒らせたりしないように、細心の注意を払っている。

(2) 「あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております」

- ①「宗教心にあつい」はギリシア語で「デイシダイモニステロス」である。
- ②この言葉は、良い意味にも悪い意味にも使われる。
 - *平均的な人たちよりも神を敬う心があるという意味
 - *非常に迷信的であるという意味
 - ・本来のギリシア語の意味は、「悪霊を恐れる」ということである。
- ③パウロは、意識してこの言葉を曖昧に使用している。
 - *もし聴衆の宗教心をほめたとするなら、それは欺瞞である。
 - *もし偶像礼拝を非難したとするなら、相手の心を閉ざしてしまう。

2. 23節

Act 17:23 私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。

(1) 町を巡りながら、アテネ人たちが拝むものを観察した。

- ①偶像（エイドウロン）という言葉を使わない。
- ②拝む対象（セバスマ）という言葉を使っている。

(2) そして、「知られない神に」と刻まれた祭壇があるのを見つけた。

- ①「知られない神」という概念が、コミュニケーションの接点となる。
- ②町のあちこちに、このような祭壇があった。
- ③これは、いわば保険を掛けるようなものである。
- ④自分たちの無知のゆえに、敬っていない神々がいるかもしれない。

⑤そういう神々の怒りを買わないために、祭壇を建てている。

⑥地震が起ったときに、「**知られない神に**」祈る習慣があった。

(3) パウロは、この習慣は間違っていないという前提で、話を進める。

①事実、あなたがたが知らないで拝んでいる神が存在している。

②その神について、私は教えたいと思う。

③この論法によって、違法に伝道しているという告発を回避することができた。

④パウロの手法は、ユダヤ教のラビの教授法でもある。

＊「知っているもの」（拝んでいるという事実）から、「知らないもの」（知られない神）へという移行がある。

I. 創造主としての神（24～25 節）

1. 24 節

Act 17:24 この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。

(1) 神は、天地を創造したお方である。

①これは、アテネ人たちの世界観を否定する内容となっている。

②ある者たちは、もし世界が創造されたものであるなら、それはデミウルゴスという存在によるものであると考えていた。

③また、物質は永遠不滅であると考える者もいた。

④さらに、ストア派は汎神論を教えていた。

⑤一般的なギリシア人は、多神教を信じていた。

(2) 神は、この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった。

①それゆえ、人間が作った宮に閉じ込めることはできない。

②アクロポリスの上に建つ荘厳なパルテノン神殿でさえも、そうである。

③この言葉の背後には、ヘブル語聖書の教えがある。

2. 25 節

Act 17:25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。

(1) 神は、自己充足しておられるお方である。

①アテネ人たちは、ささげ物によって神々を喜ばせることができると考えていた。

②しかし、神は人の手によって仕えられる必要はない。

(2) 人は、神によって支えられて生きている。

①神から、いのちと息を与えられた。

②神から、その他のすべてのものを与えられた。

Ⅱ. 被造物としての人間（26 節）

1. 26 節

Act 17:26 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。

(1) アテネ人たちは、自分たちはこの地から出た特別な民であると考えていた。

①パウロは、その神話的確信を打ち破ろうとした。

(2) パウロは、創世記1章の内容を、聖書を引用しないで解説する。

①神は、ひとりの人（アダム）からすべての国の人々を造り出した。

＊ある民族が特に優秀ということはない。

②神は、人々を地の全面に住ませた。

③神は、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになった。

④神は、活発に人類の歴史を支配しておられる。

⑤この説明の背後には、ヘブル語聖書がある。

⑥これは、エピクロス派の理神論と不可知論に対する反論になっている。

⑦これは、ストア派の汎神論と運命論に対する反論になっている。

Ⅲ. 神と人間の関係（27～28 節）

1. 27 節

Act 17:27 これは、神を求めさせるためであって、もし探し求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。

(1) 「これは」というのは前節（26 節）を受けた言葉である。

①神が摂理的に働いておられるのは、人間に神を求めさせるためである。

②神は、ご自身を求める人のそばにいてくださる。

(2) 神は、人間が神を求め、発見することを願っている。

①神を求める人は、神を見出す。

＊ロマ2：14～16 参照

- ②なぜなら、神は私たちのそばにおられるからである。
- ③神は、エピクロス派が言うような理神論の神ではない。
- ④神は、ギリシア神話のゼウスのようにオリンポス山に座している神ではない。

(2) 私たち人間は、神の中に生き、動き、存在している。

- ①つまり、神が私たち人間を支えておられるのである。
- ②このことを例証するために、パウロはギリシアの詩人たちを引用する。

2. 28 節

Act 17:28 私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです。

(1) ここでパウロは、古のギリシア人の詩人たちの言葉を紹介する。

- ①クレタ島人のエピメニデス（前 600 年頃）

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」

- ②キリキヤ人のアラトゥス（前 315～240 年）

「私たちもまたその子孫である」

- ③ギリシア人たちは、自分たちのことをゼウス神の子孫だと考えていた。
- ④これは明らかにヘブライズム思想とは異なる。
- ⑤しかしパウロは、誤解を招きかねない表現を敢えて用いて、ぎりぎりのところで聴衆の宗教心を捉とらえようとした。

(2) パウロの次の論点

- ①私たちは神の子孫なのだから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じだと考えてはならない。

(3) 次回に続く内容

- ④悔い改めへの招き（29～31 節）
- 結果（メッセージに対する応答）（32～34 節）

結論：アテネでの伝道（2）から学ぶ教訓

1. 伝道の基本的姿勢

(1) 1 コリ 9：19～22

1Co 9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。

1Co 9:20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。

1Co 9:21 律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。

1Co 9:22 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。

①伝道のためにあらゆる方法を用いようという意味ではない。

②これは、伝道しようとしている人たちとの一体化を意味している。

(2) 私たちへの教訓

①対話の接触点を探そう。

②相手に理解できる言葉で語ろう。

（例話）「ある聖会で、聖めの恵みに与りました」

③相手に敬意を表し、見下すことのないようにしよう。

2. 異邦人伝道にみられるヘブル語聖書の背景

(1) 神は、神殿以上のお方である。

①1列8:27

1Ki 8:27 それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。

②イザ66:1～2

Isa 66:1 【主】はこう仰せられる。／「天はわたしの王座、地はわたしの足台。／わたしのために、あなたがたの建てる家は、／いったいどこにあるのか。／わたしのいこいの場は、いったいどこにあるのか。

Isa 66:2 これらすべては、わたしの手が造ったもの、／これらすべてはわたしのものだ。／——【主】の御告げ——／わたしが目を留める者は、／へりくだって心砕かれ、／わたしのことばにおののく者だ。

③使7:46～48

Act 7:46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの神のために御住まいを得たいと願い求めました。

Act 7:47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした。

Act 7:48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。

(2) 神は、摂理的に歴史に介入しておられる。

①使 17 : 26

Act 17:26 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。

②申 32 : 8

Deu 32:8 「いと高き方が、国々に、／相続地を持たせ、／人の子らを、振り当てられたとき、／イスラエルの子らの数にしたがって、／国々の民の境を決められた。

「アテネでの伝道（3）」

使徒 17：29～34

1. はじめに

(1) パウロの旅程

- ①マケドニア州でのパウロ伝道が終わった。
- ②アテネから、アカヤ州での伝道が始まる。
- ③地図の表示

(2) 文脈の確認

- ①パウロはアレオパゴスに連れて行かれた。
 - *これは、聴聞である。
 - *パウロは、相当危ない状態に置かれていた。
- ②ここにあるのは、知的な異邦人に語られたメッセージのサンプルである。
 - *彼らは、旧約聖書に関して無知である。
 - *彼らは、非常に知的で哲学的である。

(3) パウロのメッセージの内容

①創造主としての神

- *天地を造った神は、人間の手で作った宮などにはお住みにならない。
- *また、何か不足しているかのように、人間に仕えてもらう必要はない。

②被造物としての人間

- *神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出した。
- *従って、ある民族が特に優秀ということはない。
- *神は、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とを定めた。
- *神は、活発に人類の歴史を支配しておられる。

③神と人間の関係

- *神が摂理的に働いておられるのは、人間に神を求めさせるためである。
- *神を求める人は、神を見出す。
- *私たち人間は、神の中に生き、動き、存在している。

(4) アウトライン

イントロダクション（22～23 節）

①創造主としての神（24～25 節）

②被造物としての人間（26 節）

③神と人間の関係（27～28 節）

④悔い改めへの招き（29～31 節）

結果（メッセージに対する応答）（32～34 節）

結論： アテネでの伝道（3）から学ぶ教訓

アテネでの伝道（3）について学ぶ。

4. 悔い改めへの招き（29～31 節）

1. 29 節

Act 17:29 そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。

(1) パウロは、偶像礼拝は非論理的だと述べる。

①私たち人間は、神の作品（神から出た者）である。

②もしそうなら、神を金や銀や石の像と考えるのは非論理的なことである。

③「神である方」とは、「theios」というギリシア語である。

*これは、「Godhead」（神格）を意味する。

④神格を、人間が作った金や銀や石の像と同じようなものと考えてはならない。

⑤神は、物質を創造した霊的存在である。

⑥ここでパウロが語っているのは、十戒の最初の2戒である。

*真の神以外の神を礼拝してはならない。

*偶像を作ってはならない。

⑦これは、アテネの人たちには相当ショッキングなメッセージである。

(2) 訳文の比較

①「神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません」（新改訳）

②「神である方を金や銀や石、人間の技術や考えで造ったものと同じであると、考えるべきではありません」（新改訳 2017）

③「神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません」（新共同訳）

④「神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない」（口語訳）

⑤「神を金・銀・石など人の工(わざ)と思考(かんがへ)とにて刻める物と等しく思ふべきにあらず」（文語訳）

(3) ロマ 1 : 22～23

Rom 1:22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、

Rom 1:23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。

2. 30 節

Act 17:30 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます。

(1) かつての時代

①神は、偶像礼拝の愚かさを見過ごしておられた。

②「見過ごしておられた」は、許容していたということではない。

＊偶像礼拝を厳しくは裁かなかったということ。

＊忍耐されたということ。

③使 14 : 16（ルステラにて）

Act 14:16 神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにし、おられました。

(2) 今の時代

①福音が啓示された結果、神はすべての人に悔い改めを命じておられる。

②時代（ディスペンセーション）が変わったのである。

③より素晴らしい啓示（光）に応答する時代が来たのである

④悔い改めとは、偶像から真の神に方向転換することである。

＊罪から離れること、行動が変化することなどは、悔い改めの実である。

⑤もし信じないなら、その罪は、かつての時代の人たちの罪よりも大きい。

⑥福音を伝える側にも、より重い責任が与えられるようになった。

(3) ロマ 3 : 25

Rom 3:25 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。

3. 31 節

Act 17:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」

(1) 神がこの世界を裁く時が近づいている。

①神は、この世界を裁くために、日を決めておられる。

②神がこの世界を裁く基準は、神の義である。

③裁きの執行者は、お立てになったひとりの人、つまりメシアである。

④ヨハ5：22

Joh 5:22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。

⑤1テサ1：10

1Th 1:10 また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

(2) 裁きの時が近いという証拠がある。

①メシアは、死なれた。

②メシアは、復活された。

③メシアの復活は、この方を通した裁きの日が定まったという証拠である。

④裁きが行われるのは、メシアの再臨の時である。

(3) 肉体の復活のメッセージは、ギリシア哲学と調和しない。

①ギリシア人たちは、肉体から抜け出したいと願っていた。

*理想的な状態は、墓の向こう側にあると考えていた。

②また、個人的裁きは、受け入れられない教えであった。

結果（メッセージに対する応答）（32～34節）

1. 32～33節

Act 17:32 死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。

Act 17:33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。

(1) パウロのメッセージは、途中で遮られた。

①アレオパゴス（評議会）は、ここまでメッセージに耳を傾けてきた。

*創造主としての神（24～25節）

*被造物としての人間（26節）

*神と人間の関係（27～28節）

②しかし、④悔い改めへの招き（29～31節）に入ると、彼らは聴くことを止めた。

*将来の裁き

＊死者の復活

＊この2つは、アテネ人たちの許容範囲を超えていた。

③あざ笑う者たちがいた。

④「このことについては、またいつか聞くことにしよう」という者たちもいた。

＊これは、丁寧な断りの言葉である。

(2) 聴聞は途中で打ち切られた。

①パウロが教えていることは、ローマ人やアテネ人にとって危険なものではない。

②全く新しい教えなので、興味深いだけである。

(3) こうしてパウロは、アレオパゴスを去った。

①これ以上パウロに質問する者は、いなかった。

②パウロを拘束する者もいなかった。

③パウロはそこを立ち去り、アテネには2度と戻らなかった。

3. 34節

Act 17:34 しかし、彼につき従って信仰に入った人たちもいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスという女、その他の人々であった。

(1) パウロのアテネ伝道の評価

①多くの収穫を得ることはなかった。

②しかし、少数ではあっても、信じる人が起された。

(2) 彼につき従って信仰に入った人たちがいた。

①デオヌシオ（アレオパゴスの30人の議員のひとり）

②ダマリスという女（貴婦人であるが、それ以上の情報はない）

③その他の人々

結論：アテネでの伝道（3）から学ぶ教訓

1. メッセージの準備ではなく、自分自身の準備に力を注ぐ。

(1) パウロのメッセージは、そのほとんどが即興であった。

①川岸でのメッセージ、広場でのメッセージ、アレオパゴスでのメッセージ

(2) 彼は、福音伝達の機会を特定の場に限定しなかった。

(3) 彼には、メッセージを準備する時間的余裕がなかった。

(4) 大事なものは、自分自身を整えることである。

2. 福音の神髄を語る。

(1) 融和的イントロダクションから始め、最後は福音の神髄を語る。

(2) ヨハ 16 : 8

Joh 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。

①偶像礼拝の罪（29 節）

②義（31 節）

③裁き（31 節）

「神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられる」（31 節）

3. 問題は、聴く人の心の中にあることを知る。

(1) 応答する人が少なかったのは、メッセージに問題があったからではない。

①問題は、聴く人の心の中にある。

②アテネ人は、論じるのは好きだが、行動に移すのは嫌という人たちである。

(2) 福音の神髄を語るなら、救われる人は必ず起される。

4. 迫害なしに次の町へ移動できることを、神に感謝する。

(1) アテネは、迫害なしに去ることが出来た最初の町である。

(2) アテネに教会が誕生したかどうかは、ルカは記録していない。

(3) 紀元 2 世紀～4 世紀にかけて、アテネ教会は多くの指導者たちを輩出している。

(4) 結果は、神に委ねればよい。

「コリントでの伝道（1）」

使徒 18：1～4

1. はじめに

(1) パウロの旅程

- ①マケドニア州でのパウロ伝道が終わった。
- ②アテネから、アカヤ州での伝道が始まる。
- ③アテネを去って、コリントに移動する。
- ④地図の表示
- ⑤写真
 - *レカイオン街道①（レカイオン港に向う街道）
 - *レカイオン街道②
 - *アクロコリントス（アフォロディーテの神殿）
 - *アポロン神殿

(2) コリントでの伝道の概観

- ①新しい同労者（1～4 節）
- ②シラスとテモテの合流（5～8 節）
- ③夜の幻（9～11 節）
- ④裁判（12～18 節）

(3) アウトライン

- ①コリント到着（1 節）
- ②新しい同労者との出会い（2～3 節）
- ③会堂での伝道（4 節）

結論： コリントでの伝道（1）から学ぶ教訓

コリントでの伝道（1）について学ぶ。

I. コリント到着（1 節）

1. 1 節

Act 18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。

- (1) パウロがアテネに滞在中に、シラスとテモテがベレアから遅れて到着した。
 - ①その後、シラスはピリピ教会を励ますために派遣された。
 - ②さらに、テモテはテサロニケ教会に派遣された。

*パウロは、この教会が迫害の中でどうなったか不安を覚えた。

③その後パウロは、ひとりでアテネ伝道を行った。

(2) パウロは、アテネを去ってひとりでコリントへ向った。

①ここにも、神の導きがある。

②この時のパウロは、不安と恐れを抱いていた。

③1コリ2:3

1Co 2:3 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。

④使18:9

Act 18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れないうで、語り続けなさい。黙ってはいけない。

⑤しかし、コリントは戦略的に重要な町なので、伝道しないわけにはいかない。

(3) コリントという町

①コリントは、アテネから約80キロ西に位置する町である。

*わずか80キロであるが、性格は全く異なる町である。

*ある人は、「ボストンを去って、ラスベガスに行くようなものだ」と言う。

②ローマ帝国内で4番目に大きな町である。

*当時の人口は、約20万人から50万人（アテネの20倍）。

*ローマを追放されたユダヤ人も多くいたであろう。

③前146年にローマ軍はコリントを破壊した。

④しかし、戦略的に重要な町なので、そのまま滅びることはあり得ない。

⑤前46年にジュリアス・シーザーが再建し、植民都市（コロニー）とした。

⑥アカヤ州の首都で、東西に2つの港を持っていた。

*レカイオンは、コリント湾からアドリア海に至るための港町。

*ケンクレアは、エーゲ海に面した港町。

*港と港の間は約6キロ。台車で船を運んだ。

*ペロポネソス半島を400キロ迂回するよりも便利。

*19世紀の終わりに、トルコ政府が運河を造った。

*東西移動のための要衝の地であった。

*アジアとヨーロッパをつなぐ役割を果たした。

⑦商業都市であり、墮落した町であった。

*「korinthiazomai」（corinthianize）という動詞が生まれた（前5世紀）

*「corinthian girl」は、娼婦のことである。

⑧偶像礼拝の町であった。

＊ギリシア神話の女神アフロディーテの神殿が、アクロコリントス（570メートル）の山頂に建っていた。

＊アフロディーテは、愛・美・性の神で、ローマ神話のビーナスに相当する。

＊その神殿には、1000人の神殿娼婦がいた。

⑨1 コリ 5：15～17

1Co 6:15 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。

1Co 6:16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。

1Co 6:17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

⑩発掘されている偶像の宮

＊メルカルト（水夫の神）

＊アポロ（音楽と詩の神）

＊アスクレーピオス（アポロの息子、医療の神）

II. 新しい同労者との出会い（2～3節）

2. 2節 a

Act 18:2a そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。

(1) パウロは、自給伝道をする必要があった。

①支援者がいない。

②生活のための糧を稼がなければならなかった。

③ラビたちは、職業を持ちながらヘブル語聖書を教えるのが普通であった。

④生徒から謝礼を受け取ってはならない。

⑤パウロは、天幕職人の組合（ギルド）を探したはずである。

(2) アキラとその妻プリスキラとの出会い。

①アキラは、ポントス生まれで、イエスを信じるユダヤ人である。

＊ポントスは、小アジアにあるローマの属州で、ビテニアの東に位置する。

②プリスキラは、プリスカとも呼ばれる。

＊プリスカの方が正式な呼び名である。

＊ルカは親しい呼び名を好むが、パウロは正式な呼び名を好む。

- ③ふたりがどのような経緯で信者になったかは、記録されていない。
- ④信者になってある年数は経っていたであろう。
- ⑤クラウデオ帝（在位 41～54 年）の勅令によってローマから退去させられた。
- ⑥最近、コリントに来ていた。

(2) クラウデオ帝によるローマからのユダヤ人の追放

- ①歴史家スエトニウス（69 年～140 年頃）は、紀元 49 年～50 年に勅令が出されたと書いている。
- ②ローマ市民でないユダヤ人たちは、ローマから追放された。
- ③「クレスタスという首謀者の煽動で、ローマのユダヤ人たちは度重なる騒動を起していた」
- ④スエトニウスの誤解
 - *キリストを伝えたことで、ユダヤ人共同体が揺れ動いたのは確かである。
 - *彼は、キリストの名前を誤って記録した。
 - *また、キリストが実際の首謀者だと思った。
 - *スエトニウスは、勅令が出されてから 20 年後に誕生している。

3. 2 節 b

Act 18:2b パウロは二人のところに行き、

Act 18:3 自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。

(1) アキラとプリスキラは、パウロに好意を示した。

- ①同業者であった。
- ②家に住ませた。
 - *商人の店は 1 階にあり、住居は 2 階にあった。
- ③一緒に仕事をした。
 - *天幕の製造、修理を行った。
 - *天幕作りは、ギリシア語で「スケイノポイオス」である。
 - *正確には、天幕職人と言うよりは、革職人である。
- ④彼らの友情は、生涯続くものとなった。

(2) 2 節では、ルカは夫のアクラを先に紹介している。

- ①彼らの名前は、ここ以外に 5 回出て来るが、4 回までプリスカが先に出て来る。
- ②使 18 : 18、26、ロマ 16 : 3、2 テモ 4 : 19。例外は 1 コリ 16 : 19。
- ③プリスカは、高貴な出の婦人であったのかもしれない。

④あるいは、なんらかの理由で夫よりも重要だと思われたのであろう。

Ⅲ. 会堂での伝道（4節）

1. 4節

Act 18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとした。

(1) コリントでも、パウロはユダヤ人伝道を優先させた。

- ①安息日ごとに会堂で論じた。
- ②ユダヤ人とギリシア人（神を恐れる異邦人）を説得しようとした。
- ③イエスは、約束のメシアであるというメッセージを語った。

(2) シラスとテモテが合流してからは、伝道に専念するようになる。

結論：コリントでの伝道（1）から学ぶ教訓

1. 弱さの中に働く神の摂理

(1) パウロは、不安と恐れを覚えていた。

- ①マケドニア州での伝道の経験
- ②コリントの町は墮落しているとの悪評
- ③同労者がいない。
- ④生活の糧をどうするか。

(2) 神は、弱っているパウロを励ました。

- ①アクラとプリスカと出会い、パウロは生涯の友人を得た。
- ②彼らもまた、ローマから追放され、弱さを覚えていたはずである。
- ③しかし、クラウデオ帝の勅令がなければ、この出会いはなかった。

(3) 私たちは、すべてのことについて神を賛美することができる。

2. 勤勉さの中に働く神の摂理

(1) パウロは、勤勉に働くことを求めた。

- ①その結果、仕事と2人の友人を得た。
- ②2人の友人も、勤勉な人たちであった。
- ③ユダヤの信仰は、職業を尊ぶものである。
- ④神は、勤勉な人を祝福される。

(2) パウロは手紙の中で、3度彼らの名を上げている。

①ロマ 16：3

Rom 16:3 キリスト・イエスにある私の同労者、プリスカとアキラによろしく伝えてください。

②1 コリ 16：19

1Co 16:19 アジアの諸教会がよろしくと言っています。アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会が、主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています。

③2 テモ 4：19

2Ti 4:19 プリスカとアキラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。

3. 罪の増すところには、恵みも増す。

(1) この町にも教会が誕生する。

①しかし、コリント教会には、多くの問題があった。

②パウロは、この教会に3つの手紙を書いた（残っているのは2つ）。

③その内容と適用は、極めて現代的である。

(2) パウロはそれらの手紙によって、位置的聖化を、实际的聖化に高めようとした。

①1 コリ 1：1～3

1Co 1:1 神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、

1Co 1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

1Co 1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

②彼らは、数々の問題を抱えながらも、「聖徒」と呼ばれている。

「コリントでの伝道（2）」

使徒 18：5～11

1. はじめに

(1) パウロの旅程

- ①マケドニア州でのパウロ伝道が終わった。
- ②アテネから、アカヤ州での伝道が始まった。
- ③アテネを去って、コリントに移動した。
- ④地図の表示

*コリントの特徴：交通の要衝の町、商業都市、偶像礼拝の町、墮落した町

(2) コリントでの伝道の概観

- ①新しい同労者（1～4 節）
- ②シラスとテモテの合流（5～8 節）
- ③夜の幻（9～11 節）
- ④裁判（12～18 節）

(3) アウトライン

- ①シラスとテモテの合流（5 節）
- ②ユダヤ人伝道から異邦人伝道へ（6～8 節）
- ③夜の幻（9～10 節）
- ④幻の結果（11 節）

結論： コリントでの伝道（2）から学ぶ教訓

コリントでの伝道（2）について学ぶ。

I. シラスとテモテの合流（5 節）

1. 5 節

Act 18:5 そして、シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。

(1) シラスとテモテの合流は、パウロに大きな励ましをもたらした。

- ①弱さの中に働く神の摂理
- ②勤勉さの中に働く神の摂理

(2) シラスは、ピリピからコリントに到着した。

①彼は、ピリピ教会からの献金を持って来た。

②ピリ 4 : 15

Php 4:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。

(3) テモテは、テサロニケから到着した。

①良いニュース（1テサ 3 : 6～8）

1Th 3:6 ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。

1Th 3:7 このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。

1Th 3:8 あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。

②携挙と再臨に関する疑問（1テサ 4 : 13～5 : 11）

③この質問に答えて、パウロは、テサロニケ人への手紙第一を書いた。

④さらに、コリントにいる間にテサロニケ人への手紙第二も書いた。

(4) シラスとテモテが合流したので、パウロは伝道に専念することができた。

①2 コリ 11 : 9

2Co 11:9 あなたがたのところにて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたのです。私は、万事につけあなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。

②この伝道は、会堂を中心としたユダヤ人伝道である。

③メッセージの内容は、「イエスがヘブル語聖書で預言されているメシアである」。

*メッセージの背景には、ダマスコ途上での体験がある。

④このメッセージは、ユダヤ人にとってはつまりき

⑤1 コリ 1 : 23

1Co 1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまりき、異邦人にとっては愚かでしょうが、

Ⅱ. ユダヤ人伝道から異邦人伝道へ（6～8 節）

1. 6 節

Act 18:6 しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く」と言った。

(1) パウロの宣教に対するユダヤ人たちの反応

①パウロは、これまでも増して力強く語り始めた。

②ユダヤ人たちは、パウロのメッセージに反抗した。

*これは、組織的な反抗である。

③彼らは、イエスの御名をののしった（冒涇した）。

*イエスについて正しくないことを言った。

④1 コリ 12 : 3

1Co 12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。

⑤これは、ピシデヤのアンテオケとテサロニケで起ったことの再現である。

(2) パウロの応答

①衣のちりを振り払った。

*自分には責任がないということを示す象徴的行為

*サンダルのちりを払うのと同じである。

②「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかけられ。私には責任がない」

*背景にエゼ 3 : 17～19 がある。

Eze 3:17 「人の子よ。わたしはあなたをイスラエル家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。

Eze 3:18 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。

Eze 3:19 もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。

*エゼ 33 : 2～9 も参照

(3) これ以降、コリントにおけるパウロの伝道は異邦人が対象になる。

①コリントの町におけるユダヤ人伝道が終わったという意味である。

②相手の方から求めて来るなら、ユダヤ人であっても対話は行われる。

③別の町に行けば、ユダヤ人伝道から始めるという原則が適用される。

2. 7 節

Act 18:7 そして、そこを去って、神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。

(1) アクラとプリスカの家から新しい家に転居した。

- ①テテオ・ユスト
- ②神を敬う異邦人で、信者になった人。
- ③名前から判断すると、ローマ市民であろう。
- ④彼の家は、会堂の隣にあった。

＊そこで集会を開くことができるほど大きな家であった。

- ⑤この家が、パウロのコリント伝道の拠点となった。

3. 8 節

Act 18:8 会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

(1) 会堂司クリスポと家族全員の救い

- ①会堂司は、施設を管理し、礼拝の秩序を維持する役割を担った。
- ②その彼がイエスを信じたことは、会堂全体にとって衝撃的なことであった。
- ③彼は旧約聖書に精通していたので、ユダヤ人に良き伝道をしたことであろう。

(2) クリスポは会堂司の職を奪われる。

- ①後継者が会堂司ソステネである（18 節に登場する）。

(3) コリント伝道の初期に信じた人たち

- ①1 コリ 16 : 15

1Co 16:15 兄弟たちよ。あなたがたに勧めます。ご承知のように、ステパナの家族は、アカヤの初穂であって、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。

- ②1 コリ 1 : 14

1Co 1:14 私は、クリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けたことがないことを感謝しています。

＊クリスポは、会堂司である。

＊ガイオは、テテオ・ユストと同一人物であろう。

・ガイオはファーストネームである。

- ③シラスとテモテが合流する前から、パウロの伝道は実を結んでいた。

Ⅲ. 夜の幻（9～10節）

1. 9節

Act 18:9 ある夜、主は幻によってパウロに、「恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけない。

(1) 「ある夜」

- ①伝道の拠点将会堂の隣に移す直前か、直後のことであろう。
- ②主は幻によってパウロに語られた。

(2) 「恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけない」

- ①この時のパウロは、恐れを抱いていた。

2. 10節

Act 18:10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」と言われた。

(1) 恐れなくともよい理由が2つある。

- ①「わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない」
 - *コリントでのパウロの身の安全は保証された。
- ②「この町には、わたしの民がたくさんいるから」
 - *伝道の実が豊かに実ることが約束された。

Ⅳ. 幻の結果（11節）

1. 11節

Act 18:11 そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

(1) 会堂を去ってから、伝道の成果はより素晴らしいものとなった。

- ①パウロは、一年六か月の間、コリントに住んで伝道を行った。
- ②ケンクレアにも活動を広げた。
- ③ロマ 16：1

Rom 16:1 ケンクレアにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。

- ④最長は、エペソでの3年、次がコリントでの1年半。

結論：コリントでの伝道（2）から学ぶ教訓

1. 弱さの中に働く神の摂理

(1) 前回の箇所では、アクラとプリスカ夫婦との出会いがあった。

(2) この箇所には、3つの祝福がある。

①シラスとテモテの合流

＊同労者が伝道活動に合流した。

②シラスがピリピ教会からの献金をもたらした。

③テモテがテサロニケ教会に関する良き知らせをもたらした。

2. 伝道の恐れからの解放

(1) 幻を通した神からパウロへの語りかけは、これで4回目である。

①ダマスコ途上において（9：4～6）

②エルサレムの神殿において（22：17～18）

Act 22:17 こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていると、夢ごちになり、

Act 22:18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』

③トロアスにおいて（16：9）

④コリントにおいて

(2) 神の約束のことば

①使 18：9～10

Act 18:9 ある夜、主は幻によってパウロに、「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。

Act 18:10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」と言われた。

②神がともにおられる。

＊「だれもあなたを襲って、危害を加える者はない」は、パウロに与えられた約束である。

③「この町には、わたしの民がたくさんいるから」

＊パウロは、この町に信仰に入る人が多くいるとは考えなかったはずである。

＊しかし、神の視点は違う。

④神の選びと神の予知を信じることは、私たちを無責任にするのではない。

＊この町に神が招かれた人たちがいると確信するので、伝道するのである。

「コリントでの伝道（3）」

使徒 18：12～18

1. はじめに

(1) パウロの旅程

- ①マケドニア州でのパウロの伝道が終わった。
- ②アテネから、アカヤ州での伝道が始まった。
- ③アテネを去って、コリントに移動した。
- ④地図の表示

＊コリントの特徴：交通の要衝の町、商業都市、偶像礼拝の町、墮落した町

- ⑤写真3点 ベイマ①②③

(2) コリントでの伝道の概観

- ①新しい同労者（1～4 節）
- ②シラスとテモテの合流（5～8 節）
- ③夜の幻（9～11 節）
- ④裁判（12～18 節）

(3) アウトライン

- ①ユダヤ人の訴え（12～13 節）
- ②ガリオの判決（14～17 節）
- ④コリントを去るパウロ（18 節）

結論： コリントでの伝道（3） から学ぶ教訓

コリントでの伝道（3） について学ぶ。

I. ユダヤ人の訴え（12～13 節）

1. 12 節

Act 18:12 ところが、ガリオがアカヤの地方総督であったとき、ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行って、

(1) 地方総督ガリオの家系

- ①大セネカ（マルクス・アンナエウス・セネカ）という修辞学者、著述家がいた。
- ②彼には3人の息子がいた。

＊ルキウス・アンナエウス・ノバトゥス

・修辞学者のルキウス・ユリウス・ガリオの養子になった。

- ・後にルキウス・ユリウス・アンナエウス・ガリオと呼ばれた。
- ・使 18：12 に登場するのは、このガリオである。

＊小セネカ（ルキウス・アンナエウス・セネカ）

- ・ストア派の哲学者で、ネロの家庭教師となった。
- ・ローマでは大きな影響力を持っていた。

＊アンナエウス・メラ

(2) ガリオは、大セネカの長男であり、小セネカの兄である。

- ①温厚な好人物としての評価が高かった。
- ②弟の小セネカは、兄ガリオを絶賛している。
「ガリオほど魅力的な人物は他にいない」
「兄のガリオを全身全霊で愛したとしても、まだ足りないほどである」

(3) ガリオは、アカヤの地方総督であった。

- ①ローマから派遣された地方行政官である。
- ②彼の任期は、紀元 51～52 年と言われている（病気のために途中で退職した）。
- ③この裁判が行われたのは、恐らく紀元 51 年の終わり頃であろう。
- ④これは、パウロの活動の絶対年代を決めるための情報の一つである。
- ⑤ガリオと小セネカは、紀元 65 年にネロによって殺される。

(4) 不信仰なユダヤ人たちは、パウロ追求の手を緩めなかった。

- ①使 18：6 では、パウロに反抗して、暴言を吐いた。
- ②ここでは、パウロを法廷に引き出した。
- ③新任の地方総督が来たので、勝訴する可能性があると考えたのでであろう。

(5) 法廷と訳された言葉

- ①「審判(さばき)の座」(文語訳)
- ②ベイマ (bema)
- ③ここは、アゴラ（市場）の中央に造られた一段高い場所である。
- ④ガリオはここから判決を出す。
- ⑤裁判の様子を傍聴することが、一般人にも許された。

2. 13 節

Act 18:13 「この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています」と訴えた。

(1) 訴えの内容

- ①ユダヤ教は、ローマの公認宗教であった。
- ②ユダヤ人がユダヤ人を改宗させることは許されていた。
- ③しかし、ユダヤ人でないローマ市民に伝道することは違法であった。
- ④「この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています」
- ⑤つまり、ローマ市民に、非公認の宗教を伝えているということである。

(2) ピリピとテサロニケでも、同じ訴えがあった。

①ピリピ（使 16：20～21）

Act 16:20 そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、

Act 16:21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」

②テサロニケ（使 17：6～7）

Act 17:6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱり行って、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。

Act 17:7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」

Ⅱ. ガリオの判決（14～17 節）

1. 14～15 節

Act 18:14 パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。「ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げますが、

Act 18:15 あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよからう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。」

(1) 被告パウロ

- ①ベイマに立ち、そこに置かれた腰の高さほどの円柱に手を置いて宣誓する。
- ②次に、証言を開始する。
- ③しかし、パウロが話し出す前に、ガリオがさえぎった。

(2) 裁判官ガリオの言葉

- ①全体的な言葉の雰囲気は、訴えている者たちへの不快感と軽蔑である。

＊「俺を誰だと思っているのか」

②「ユダヤ人諸君」と、パウロを訴えているユダヤ人たちに呼びかける。

③この問題が刑事事件なら、自分を取り上げる。

④しかしこの問題は、ユダヤ教内部の教理に関する争いである。

＊ユダヤ教のラビの風貌をしてるパウロを見れば、すぐに分かる。

＊それゆえ、自分たちで始末をつけるがよい。

⑤申立て自体が不適法なので、門前払いに処する（却下）。

⑥ガリオは、いわば政教分離を貫いたのである。

2. 16～17 節

Act 18:16 こうして、彼らを法廷から追い出した。

Act 18:17 そこで、みなのは、会堂管理者ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。

ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。

(1) ここには、ガリオの反ユダヤ的姿勢が見られる。

①温厚な総督の裁定に驚いたユダヤ人たちは、なおも食い下がったのであろう。

②ガリオは、退廷を命じるのではなく、彼らを力づくで追い出した。

(2) ガリオの言葉が引き金となって、群衆の反ユダヤ感情が噴出した。

①彼らは、ユダヤ人の指導者に襲いかかった。

＊ユダヤ人同士の争いにローマ人を巻き込むなという感情があった。

②会堂管理者ソステネが標的となった。

＊クリスポの後任として会堂管理者になった人物である。

③群衆は、ベイマの前でソステネを打ちたたいた。

(3) ガリオは、無関心であった。

①小さな暴力は、総督が関わる案件ではない。

②宗教に無関心ということではなく、管轄外の案件には無関心という意味である。

Ⅲ. コリントを去るパウロ（18 節）

1. 18 節

Act 18:18 パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。パウロは一つの誓願を立てていたのもので、ケンクレヤで髪をそった。

(1) 紀元 52 年の秋、パウロはアンテオケ教会に帰ろうとした。

- ①コリントの状況が落ち着いてきた。
- ②他の地区での伝道の時期が来た。
- (2) ケンクレアの港から出発した。
 - ①プリスキラとアクラも同行した。
 - ②シラスとテモテは、アカヤに留まったと思われる。
- (3) 「パウロは一つの誓願を立てていたので、ケンクレヤで髪をそった」
 - ①ナジル人の誓願（民6：1～21）
 - ②誓願の期間、ぶどう酒を控え、頭にかみそりを当てない。
 - ③誓願の期間が終わると、神殿で頭を剃り、その髪をいけにえをととも燃やす。
 - ④パウロの誓願は、献身の誓願か、感謝（安全が守られた）の誓願であろう。
 - ⑤パウロが採用した方法は、ディアスポラのユダヤ人の習慣であろう。
 - *エルサレムに上るための時間的、金銭的余裕のない場合の方法
 - ⑥律法からの自由とは、守る自由と守らない自由を含む。
 - ⑦東からアジアに入ることは禁じられたが、西から入ることは許された。

結論：コリントでの伝道（3）から学ぶ教訓

1. 私たちも、ベイマの前に立つ。

- (1) ベイマという言葉は、以下の2箇所に出て来る。

①マタ 27：19

Mat 27:19 また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言わせた。「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」

②2 コリ 5：10

2Co 5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

③最近よく受ける質問

- *「福音の三要素」は信じた。
- *しかし、救われているかどうか確信がない。
- *それは、死後に明らかになるのではないか。
- ④キリストを信じた人は、すべて救われる。
- ⑤キリストの御座の裁きは、信者の褒賞を決めるための裁きである。

2. ガリオによる裁判の結果

(1) パウロが伝える福音は、ユダヤ教の一部であると認定された。

①つまり、キリスト教は公認宗教の一部であるという判断である。

(2) 総督による判決は、ローマ帝国内のすべての総督の判断に影響を与えた。

①いわゆる判例が出来たのである。

②長官（ピリピ）や役人（テサロニケ）の判決とは比較にならないほど重い。

③パウロは、7 年後にカイザルに上訴することになる。

＊パレスチナ在住のローマの行政官が、ユダヤ人の影響を受け過ぎていると感じたのであろう。

＊使 25：11（ユダヤ総督フェストに対して）

Act 25:11 もし私が悪いことをして、死罪に当たることをしたのであれば、私は死をのがれようとはしません。しかし、この人たちが私を訴えていることに一つも根拠がないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイザルに上訴します。」

(3) これ以降、約 13 年間にわたり伝道の自由が与えられた。

①紀元 64 年、ネロはローマの大火をクリスチャンの仕業とした。

②それ以降、キリスト教への迫害が始まる。

3. ソステネのその後

(1) 会堂管理者クリスポが、パウロの伝道によって救われた。

①彼は、会堂を追われた。

(2) その後任になったのが、ソステネである。

①彼は、ベイマの前で野次馬たちによって打ちたたかれた。

②大変な目に遭ったのである。

③その後どうなったのかは、1 コリ 1：1 を見れば分かる。

1Co 1:1 神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、

④ソステネは、パウロの書記となっている。

⑤彼は、苦難を通してキリストに出会ったのである。

「第二次伝道旅行の完結」

使徒 18 : 19～22

1. はじめに

(1) 第二次伝道旅行の旅程

- ①アンテオケからトロアス
- ②マケドニア州（ピリピ、テサロニケ、ベレア）
- ③アカヤ州（アテネ、コリント）
- ④コリント→エペソ→カイザリヤ→エルサレム→アンテオケ
- ⑤これで、第二次伝道旅行が完結する。
- ⑥地図の表示
- ⑦写真④点 ケンクレア①②、アルテミス神殿①②

(2) アウトライン

- ①エペソの会堂訪問（19 節）
- ②ユダヤ人たちの反応（20～21 節）
- ③エルサレムに向って（22 節）

結論： 第二次伝道旅行のまとめ

- (1) 移動距離
- (2) 代表的なメッセージ
- (3) 救われた人々
- (4) 「神のみこころなら」

第二次伝道旅行の完結について学ぶ。

I. エペソの会堂訪問（19 節）

1. 19 節

Act 18:19 彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた。

- (1) ケンクレアの港を出て、エペソに着いた。
 - ①アカヤ州の首都はコリントで、ケンクレアはその港である。
 - ②アジア州の首都はエペソで、巨大な港を有していた。
 - ③ケンクレアとエペソの間を往き来する船便が、エーゲ海では最も多かった。
 - ④エペソは、アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港であった。

(2) エペソという町

- ①前 1044 年に建設された古代からある商業都市である。
- ②前 4 世紀以降、ギリシア風都市となった（アレキサンダー大王と後継者たち）。
- ③前 2 世紀の終わりに、ローマが支配する都市となった。
- ④大いに栄えた商業都市で、当然のことながらアジア州の首都となった。
- ⑤当時の人口は、20～25 万人であろう。
- ⑥ユダヤ人にも寛容だったので、多くのユダヤ人が住んでいた。
- ⑦と同時に、魔術やオカルト的風習でも有名であった。
- ⑧世界の七不思議のひとつアルテミス神殿があった。
 - *66m×130m もある巨大な神殿
 - *アテネのパルテノン神殿の 4 倍もある。
- ⑨アルテミスは、多数の乳房を持った豊穡の女神。
 - *アジアにおける偶像礼拝と売春の中心地であった。
 - *地域経済も、アルテミス信仰によって潤っていた。

(3) 第二次伝道旅行の初期において、パウロはエペソを目差していたと思われる。

- ①しかし、御霊はパウロをトロアスに導き、そこからマケドニアに導いた。
- ②第二次伝道旅行の終わりに、パウロはエペソを訪問することができた。
- ③しかしこの訪問は、旅行の途中で立ち寄ったという程度のものではあった。
- ④とは言え、エペソ教会の基礎を築く重要な訪問となった。

(4) 「パウロはふたりをそこに残し、」

- ①プリスキラとアクラが同行していた。
 - *恐らく、パウロの伝道を助けるためであろう。
- ②彼らは、エペソで船を下りて、この町に数年間留まることになった。
- ③最終的には、紀元 57 年までにはローマに戻るようになる（ロマ 16 : 3）。

Rom 16:3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによりしく伝えてください。

(5) 「自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた」

- ①ふたりと分かれたパウロは、単独で会堂に入って行った。
- ②船が出帆するまでの空き時間を、伝道のために用いたのである。
- ③彼は、単独で会堂に入り、ユダヤ人のためのメシアについて彼らと論じた。
 - *イエスは、約束のメシアであることを、ヘブル語聖書から論じた。

Ⅱ. ユダヤ人たちの反応（20～21 節）

1. 20 節

Act 18:20 人々は、もっと長くどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、

(1) 他の町のユダヤ人たちとは異なり、エペソのユダヤ人たちは興味を示した。

①彼らは、もっと長くどまるようにパウロに頼んだ。

②パウロから、さらなる解き明かしを聞きたいと願ったのである。

(2) しかしパウロは、聞き入れなかった。

①祭りまでにエルサレムに着きたいと願っていた。

＊過越の祭りか、五旬節の祭りか、仮庵の祭りか、断定できない。

＊KJV:「I must by all means keep this feast that cometh in Jerusalem:」

＊この文を本来書かれていたものと認める学者たちもいる。

②彼は、モーセの律法に慣れ親しんだユダヤ人である。

③彼には、律法を守る自由も、守らない自由もあった。

④エルサレムに上る目的は何か。

＊エルサレム教会（母教会）と指導者たち（ヤコブ）への挨拶

＊エルサレムで再会する旧友たちへの伝道

2. 21 節

Act 18:21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。

(1) パウロは、エペソでは伝道の扉が開かれていることを実感した。

①「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言った。

②これは、外交辞令ではない。本気である。

③パウロは、一年も経たない内にエペソに戻ることになる。

Ⅲ. エルサレムに向って（22 節）

1. 22 節

Act 18:22 それからカイザリヤに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンテオケに下って行った。

(1) エペソからカイザリヤへ

①アンテオケに帰るなら、セルキヤに向う船に乗る。

②しかし、エルサレムに上る予定なので、カイザリヤに上陸した。

③エペソからカイザリヤまで、約800キロの船旅である。

(2) カイザリヤからエルサレムへ

- ①「上り」「下り」は、エルサレムに近づくか、遠ざかるかを表現した言葉である。
- ②パウロは、母教会にあいさつした。伝道の報告をしたのである。

(3) エルサレムからアンテオケへ

- ①エルサレムから北に向った。
- ②これで、第二次伝道旅行が完結した。
- ③さほど時間を置かずに、第三次伝道旅行が始まる。

結論：第二次伝道旅行のまとめ

1. 移動距離

- (1) 第一次伝道旅行は、2,240 キロを移動した。
- (2) 第二次伝道旅行は、約 2 年半で、その倍の 4,480 キロを移動した。
 - ①使 15：40～18：22
 - ②京都からシンガポールまで約 5,000 キロある。

2. 代表的なメッセージ

- (1) 第一次伝道旅行では、ピシデヤのアンテオケでのメッセージ。
 - ①使 13：16 以降
 - ②これは、会堂でユダヤ人に向けて語られたものである。
- (2) 第二次伝道旅行では、アテネでのメッセージ。
 - ①使 17：22 以降
 - ②これは、アテネのアレオパゴスで異邦人に向けて語られたものである。
- (3) 第三次伝道旅行では、ミレトでのメッセージ。
 - ①使 20：18 以降
 - ②これは、エペソの長老たち（信者）に向けて語られたものである

3. 救われた人々

- (1) パウロを通して、ヨーロッパは福音に触れた。
- (2) その結果、多くのユダヤ人が救われた。
 - ①パウロは、異邦人のための使徒として召された。
 - ②しかし、ユダヤ人伝道を優先させた。
- (3) テモテ、ルカ、アクラとプリスキラ夫婦、などとの出会いがあった。

(4) 多くの異邦人とユダヤ人が救われた。

- ①神を敬う異邦人のビジネスパーソン、リディアとその一家の救い
- ②ローマ人の看守とその一家の救い
- ③アテネのアレオパゴスの議員（デオヌシオ）
- ④2 人の会堂管理者（クリスポとソステネ）

4. 「神のみこころなら」

(1) 使 18 : 20～21

Act 18:20 人々は、もっと長くどどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、

Act 18:21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。

- ①「神のみこころなら」「if God wills」
- ②ユダヤ人たちが使用する常套句である。今でもユダヤ人たちはこの言葉を使う。
- ③異邦人の中にも使う人は多い。
- ④神の主権を認める言葉である。

(2) この言葉の 2 種類の使い方

- ①自分の計画や願いを中心に置いて、「神のみこころなら」と言う人がいる。
- ②神の計画の成就を願い、「神のみこころなら」と言う人がいる。

(3) 第二次伝道旅行から学ぶべき教訓は、パウロが見ている世界の広さである。

(ILL) 30 代の頃に思い描いていた教会成長

- ①神の計画の全貌を理解することの重要性
- ②そのために、字義通りの解釈を行うのである。
- ③また、ユダヤ的視点から聖書を読むのである。

「第三次伝道旅行の始まり」

使徒 18 : 23～28

1. はじめに

(1) 第三次伝道旅行の概略

- ①使 18 : 23～21 : 17（紀元 53 年の春から 56 年の春）
- ②パウロは、ひとりで出かけている。
- ③未信者への伝道ではなく、フォローアップが主な目的の旅である。
- ④第一次伝道旅行で立てられた諸教会（ガラテヤ地方とフルギヤ）を訪問した。
 - * 目的は、弟子たちを力づけるためである。
 - * 大宣教命令の最終目的は、イエスの弟子を育てることである。
- ⑤第三次伝道旅行の中心地は、エペソである。
 - * 第二次伝道旅行の中心地は、コリントであった。
 - * エペソは、小アジア全域に福音が宣べ伝えられる基地となる。
- ⑥パウロは、伝道者、教師、牧師として奉仕し、その働きにはしるしが伴った。
- ⑦パウロに対する敵対は、ユダヤ人からではなく、異邦人からやって来る。
- ⑧パウロは、最後にエルサレムに上る。
 - * アンテオケ、小アジア、ギリシア、エルサレム
- ⑨使 21 : 18～28 : 31 で、パウロは逮捕され、ローマに行く。

(2) アウトライン

- ①第三次伝道旅行の始まり（23 節）
- ②アポロの紹介（24～28 節）

結論：

- (1) アポロの信仰
- (2) アクラとプリスキラの信仰

第三次伝道旅行の始まりについて学ぶ。

I. 第三次伝道旅行の始まり（23 節）

1. 23 節

Act 18:23 そこにしばらくいてから、彼はまた出発し、ガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた。

- (1) 「そこにしばらくいてから、」

①ルカは、アンテオケでのパウロの活動については報告していない。

＊当然パウロは、宣教報告を行ったことであろう。

②アンテオケに戻って約 6 か月で、彼は第三次伝道旅行に出かけることにした。

＊紀元 53 年春である。天候が穏やかになる季節。

③今回の伝道旅行の最終目的地は、エペソである。

④使 18 : 20～21

Act 18:20 人々は、もっと長くとどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、

Act 18:21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。

⑤第二次伝道旅行では、エペソに向うことを超自然的に禁じられた。

⑥今回は、同行者なしに、単独でエペソに向う。

⑦旅の途中で、シラスやテモテと再会することを期待していたのであろう。

(2) 「ガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた」

①第一次伝道旅行と第二次伝道旅行での宣教地を巡った。

②デルベ、ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ

③弟子訓練を行った。これは、主に教師としての奉仕である。

④このようにして、徐々にエペソに近づいて行った。

Ⅱ. アポロの紹介 (24～28 節)

1. 24 節

Act 18:24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。

(1) ここで場面は、エペソに切り替わる。

①ルカは、パウロがエペソを去って以降にエペソで起ったことを記録している。

②アポロというユダヤ人伝道者が、エペソで顕著な働きを展開していた。

(2) アポロについて

①ディアスポラ（離散）のユダヤ人で、エジプトのアレキサンドリア出身。

②アレキサンドリアは、学芸の一大中心地で、大きなユダヤ人共同体もあった。

＊アテネ、アレキサンドリア、タルソが 3 大大学都市。

③アレキサンドリアは、ディアスポラの地でのユダヤ教の中心地であった。

④その町出身のアポロは、雄弁な伝道者で、ヘブル語聖書に精通していた。

＊アレキサンドリアで、弁論術の訓練を受けたのであろう。

2. 25 節

Act 18:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。

(1) 彼は会堂で、聖書に基づいて、イエスこそメシアであることを正確に教えていた。

①「主の道」とは、キリスト教信仰のことである。

②彼のイエスに関する知識は正確であったが、十分ではなかった。

(2) 「ただヨハネのバプテスマしか知らなかった」

①彼の理解度は、十字架以前の弟子たちと同じようなものであった。

②彼は、バプテスマのヨハネの弟子であったと思われる。

3. 26 節

Act 18:26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。

(1) プリスキラとアクラは、会堂でアポロのメッセージに耳を傾けていた。

①妻の名が先に出ている。理由は分からない。

②アポロが語る内容が不十分であることは、すぐに分かった。

(2) 彼らはアポロを自分の家に招いて、より正確な福音理解を提供した。

①アポロは、霊に燃えていた。

②この夫婦が提供する新しい情報を喜んで受け取ったことであろう。

4. 27～28 節

Act 18:27 そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。

Act 18:28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。

(1) この夫婦は、エペソの信者たちと一緒にあってアポロをコリント教会に推薦した。

①「兄弟たち」という言葉は、エペソに教会が出来ていたことを示唆している。

＊パウロが立てたのか。

＊アクラとプリスキラ夫婦が立てたのか。

(2) アポロは、パウロがエペソに着く前に去った（意図的かどうかは分からない）。

- ①やがて彼は、コリントで雄弁な教師として活躍するようになる。
- ②その影響力は、コリント教会に「アポロ派」ができてしまうほどであった。
- ③1 コリ 1 : 12

1Co 1:12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。

(3) コリントでのアポロの奉仕

- ①彼は、コリント教会の信者たちを大いに助けた。
 - * 「すでに恵みによって信者になっていた人たち」
 - * ルカは、救いは恵みによることを強調している。
- ②アポロは、コリントのユダヤ人共同体に大きな影響を与えた。
 - * 彼は、公然とユダヤ人たちを論破した。
 - * 福音の全貌を知ったので、さらにパワーアップした。
- ③彼は、聖書によって論じた。
- ④パウロと同じく、メシア預言を用いてイエスがメシアであることを証明した。

結論：

1. アポロの信仰

(1) 使 18 : 25

Act 18:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。

- ①彼の理解度は、十字架以前の弟子たちと同じようなものであった。
- ②アポロは、イエスがメシアであると信じていた。
- ③しかし、イエスの十字架の死、復活、昇天、聖霊降臨に関しては無知であった。
- ④ユダヤ教からキリスト教への移行期においては、このような人が多くいたと思われる。
- (2) 彼の知識の中から、過去 20 年間に起ったことの情報が欠落している。
 - ①彼は、バプテスマのヨハネの奉仕を知っていた（ヨハネの弟子であった）。
 - ②バプテスマのヨハネがイエスをメシアだと指し示したことも知っていた。
 - ③イエスが公生涯に入ったことも知っていた（イエスの弟子となった）。
 - ④彼は、公生涯の結末を見る前に、イスラエルを去ったのであろう。
 - ⑤彼のメッセージは、悔い改めてイエスをメシアとして受け入れよという段階で留まっていた。
- (3) 彼は、聖霊によるバプテスマを受けていなかった。

- ①つまり、救われていなかった。
- ②普遍的教会の一員になっていなかった。
- ③聖霊の内住がなかった。
- (4) 福音を理解したアポロは、パウロが築いた土台の上に自らの働きを積み上げた。

①1 コリ 3 : 4～8

1Co 3:4 ある人が、「私はパウロにつく」と言えば、別の人は、「私はアポロに」と言う。そう
いうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。

1Co 3:5 アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰に入るために用
いられたしもべであって、主がおののちに授けられたとおりのことをしたのです。

1Co 3:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

1Co 3:7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてく
ださる神なのです。

1Co 3:8 植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身
の報酬を受けるのです。

- (5) 見落としてはならないもの

旧約聖書→バプテスマのヨハネ→キリスト教という流れ

- (6) アポロの信仰から学ぶ教訓

①イエスは救い主だと信じるだけでは、救われていない。

②「福音の三要素」を理解し、信じる必要がある。

③コロ 2 : 12

Col 2:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死
者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされた
のです。

④ロマ 6 : 3～6

Rom 6:3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを
受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。

Rom 6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られ
たのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私た
ちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

Rom 6:5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっている
のなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

Rom 6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、
私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

2. アクラとプリスキラ夫婦の信仰

(1) 仲の良い夫婦である。

①常に、2人の名前がいっしょに出てくる。

②良き人生のパートナーであり、神の国のための同労者である。

(2) 献身的な夫婦である。

①ロマ 16：3～4

Rom 16:3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによりしく伝えてください。

Rom 16:4 この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

②1 コリ 16：19

1Co 16:19 アジヤの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から、あなたがたによりしくと言っています。

(3) 状況に対応する柔軟さを持った夫婦である。

①ローマからコリントへ

②コリントからエペソへ

③エペソからローマへ

(4) 謙遜な夫婦である。

①彼らは、アポロの足りない点を、公の場ではなく、個人的に指摘した。

②神学校を出たての若い牧師は、靈的に成長した信徒の助言を必要としている。

③謙遜と恵みに満ちた者でなければ、良き助言者にはなれない。

「12人の弟子たちの救い」

使徒19：1～7

1. はじめに

(1) 第三次伝道旅行が始まった。

①使18：23～21：17（紀元53年の春から56年の春）

②パウロは、ひとりで出かけている。

③未信者への伝道ではなく、フォローアップが主な目的の旅である。

④第一次伝道旅行で立てられた諸教会（ガラテヤ地方とフルギヤ）を訪問した。

⑤第三次伝道旅行の中心地は、エペソである。

(2) エペソでのパウロの奉仕（サンドイッチ形式の記述）

①12人の弟子たちのエピソード（1～7節）

②エペソでの奉仕（8～10節）

③スケアの7人の息子たち（11～20節）

(3) アウトライン

①エペソ到着（1節a）

②12人の弟子たちの不十分な信仰（1b～3節）

③パウロの教え（4～5節）

④聖霊降臨（6～7節）

結論：

(1) 先駆者バプテスマのヨハネの影響は、長く続いた。

(2) 異言の現象は、新しいグループが救われる際に起っている。

(3) 聖霊が下る方法に一定のパターンはない。

(4) 使徒の働きから教理を導き出してはならない。

12人の弟子たちの救いについて学ぶ。

I. エペソ到着（1節a）

1. 1節a

Act 19:1 アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通してエペソに来た。

(1) アポロは、エペソからコリントに移動した。

①エペソ教会からの推薦状を持ってコリント教会を訪問した。

- ②アポロは、コリント教会で大いに用いられていた。
- ③その時期に、パウロはエペソに着いた。

(2) パウロの旅

- ①アンテオケから徒歩で 300 キロメートル以上を旅しながら、エペソに着いた。
- ②エペソまでは 2 つのルートがあった。
 - *北のルート：奥地（高地）を通るルート。道は険しいが、この方が近道。
 - *南のルート：ローマが建設した道路を通るルート。
- ③パウロは、北のルートを選択した。

(3) エペソについての復習

- ①エペソは、アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港であった。
- ②前 1044 年に建設された古代からある商業都市である。
- ③前 4 世紀以降、ギリシア風都市となった（アレキサンダー大王と後継者たち）。
- ④前 2 世紀の終わりに、ローマが支配する都市となった。
- ⑤大いに栄えた商業都市で、当然のことながらアジア州の首都となった。
 - *パウロの時代、商業都市としては最盛期を過ぎていた。
 - *カイストロス川の土砂が、港に堆積し始めた。
- ⑥ユダヤ人にも寛容だったので、多くのユダヤ人が住んでいた。
- ⑦世界の七不思議のひとつアルテミス神殿があった。
 - *66m×130m もある巨大な神殿
 - *アテネのパルテノン神殿の 4 倍もある。
 - *アレキサンダー大王が資金援助をした。
- ⑧アルテミスは、多数の乳房を持った豊穡の女神である。
 - *ここは、アジアにおける偶像礼拝と売春の中心地であった。
 - *地域経済も、アルテミス信仰によって潤っていた。
- ⑨ここでパウロは、約 3 年にわたって伝道を継続し、生涯で最大の成果を上げる。
- ⑩黙示録 2 章に出て来る「七つの教会」は、この期間に設立されたものである。

II. 幾人かの弟子たちの不十分な信仰（1b～3 節）

1. 1b～2 節

Act 19:1b そして幾人かの弟子に出会って、

Act 19:2 「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは、「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした」と答えた。

(1) 「弟子」というのは、通常は、イエスの弟子である信者を指す。

- ①パウロは最初、彼らを信者だと思い込んでいた。
- ②しかし、交わりをしている内に、彼らの信仰が不十分であることを感じた。

(2) そこでパウロは質問した。

①「信じたとき、聖霊を受けましたか」

②英語訳に問題がある。

「Have ye received the Holy Ghost since ye believed?」(KJV)

「Did ye receive the Holy Spirit when ye believed?」(ASV)

③KJVは、信じることと聖霊を受けることを、別のこととして区別している。

④正しくは、信じた瞬間に私たちは聖霊を受ける。

(3) 訳文の比較

「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした」(新改訳)

「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」(新改訳2017)

「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」(新共同訳)

「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことはありません」(口語訳)

「いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず」(文語訳)

- ①彼らは、福音の内容を知らなかった。
- ②それどころか、聖霊の約束が与えられていることも知らなかった。
- ③ヨハネはメシアを「聖霊と火とのバプテスマをお授けになる」と紹介していた。
- ④彼らの理解度は、アポロ以下であった。

2. 3 節

Act 19:3 「では、どんなバプテスマを受けたのですか」と言うと、「ヨハネのバプテスマです」と答えた。

(1) 訳文の比較

「では、どんなバプテスマを受けたのですか」(新改訳)

「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」(口語訳)

「Unto what then were ye baptized?」(KJV)

「Into what then were ye baptized?」(ASV)

①バプテスマの基本的意味は、一体化である。

(2) 回答は、「ヨハネのバプテスマです」であった。

①彼らは、イエスの弟子ではなく、バプテスマのヨハネの弟子であった。

②つまり彼らは、20 年前にバプテスマのヨハネから洗礼を受けたのである。

＊しかし、イエスの公生涯以降の出来事を知らなかった。

＊イエスの公生涯が始まる前に、イスラエルの地を去ったのであろう。

③彼らは、アクラとプリスキラ夫婦に出会う前のアポロに似ている。

＊彼らは、まだ救われていなかった。

＊彼らは、聖霊の内住を経験していなかった。

④ユダヤ教からキリスト教への移行期において、このような信者がいた。

Ⅲ. パウロの教え（4～5 節）

1. 4 節

Act 19:4 そこで、パウロは、「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです」と言った。

(1) パウロは、彼らに福音を説明した。

①アクラとプリスキラ夫婦がアポロに説明したのと同じことが起っている。

②バプテスマのヨハネの役割は、メシアを迎えるための準備をしたことである。

③準備とは、悔い改めのバプテスマを授けることであった。

(2) パウロは、イエスの死、埋葬、復活、昇天、聖霊降臨について説明した。

①ルカは記録していないが、それは当然のことである。

2. 5 節

Act 19:5 これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。

(1) 彼らはパウロが語る福音を信じた。

①つまり、イエスの弟子となったのである。

②そして、信仰の結果としての水のバプテスマを受けた。

③信仰がなければ、水のバプテスマは無意味である。

(2) 訳文の比較

「主イエスの御名によってバプテスマを受けた」（新改訳）

「they were baptized in the name of the Lord Jesus.」（KJV）

「they were baptized into the name of the Lord Jesus.」（ASV）

①バプテスマは、イエス・キリストとの一体化である。

IV. 聖霊降臨（6～7 節）

1. 6 節

Act 19:6 パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。

- (1) パウロの按手によって、聖霊が彼らに下った。
 - ①異言と預言が、聖霊降臨のしるしとなった。
 - ②これは、彼らが真の弟子となったことをパウロに示すためのしるしである。
 - ③彼らは、バプテスマのヨハネの弟子から、イエスの弟子になったのである。

2. 7 節

Act 19:7 その人々は、みなで十二人ほどであった。

- (1) 12 という数字には象徴的意味はない。
 - ①12 という数字を基に、教会が霊的イスラエルであると結論付けてはならない。
 - ②むしろ、12 人の弟子たちは、やがて救われるユダヤ人たちの先駆けである。
 - ③エゼ 36 : 26～27

Eze 36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

Eze 36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行わせる。

結論：

1. 先駆者バプテスマのヨハネの影響は、長く続いた。

(1) 使 1 : 5（復活のイエスのことば）

Act 1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

(2) 使 11 : 16（ペテロの言葉）

Act 11:16 私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる』と言われたみことばを思い起こしました。

(3) 使 13 : 25（パウロの言葉）

Act 13:25 ヨハネは、その一生を終えようとするころ、こう言いました。『あなたがたは、私をだれと思うのですか。私はその方ではありません。ご覧なさい。その方は私のあとからおいでになります。私は、その方のくつのひもを解く値うちもありません。』

(4) 使 18 : 25（アポロの信仰の状態）

Act 18:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また

教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。

(5) 使 19 : 3~4 (エペソの弟子たちの状態)

2. 異言の現象は、新しいグループが救われる際に起っている。

(1) 使徒の働きに 4 回その記録が出て来る。

①使 2 章 : ペンテコステの日のユダヤ人の救い

②使 8 章 : サマリヤ人の救い

③使 10 章 : 異邦人コルネリオの救い

④使 19 章 : バプテスマのヨハネの弟子たちの救い

(2) しかしこれらの現象は、普遍的真理として適用すべきものではない。

①ルカは、歴史上起こったことを記録しているだけである。

②12 人は、バプテスマのヨハネの弟子グループの中から救われた人たちである。

③聖霊の賜物としての異言は今もあるが、すべての人が受けるわけではない。

3. 聖霊が下る方法に一定のパターンはない。

(1) 4 回の出来事の記録

①使 2 章 : 12 使徒たちの場合は、ヨハネの洗礼による悔い改め→イエスへの信仰→聖霊降臨の順である。

②使 8 章 : イエスへの信仰→水の洗礼→使徒たちによる按手→聖霊降臨

③使 10 章 : イエスへの信仰→聖霊降臨→水の洗礼

④使 19 章 : ヨハネの洗礼による悔い改め→イエスへの信仰→水の洗礼→使徒パウロによる按手→聖霊降臨

4. 使徒の働きから教理を導き出してはならない。

(1) 使徒の働きではなく、パウロ書簡の中に、適用すべき真理がある。

(2) 聖霊を受けていない信者は、あり得ない。

①ロマ 8 : 9

Rom 8:9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

②1 コリ 12 : 13

1Co 12:13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

(3) 体験によって聖書の教えを吟味してはならない。

- (4) 聖書の教えによって、体験を吟味する必要がある。
- (5) 神の約束は、その時体験的に分からなくても、必ず分かるようになる。